

# 一筋縄では釣れない天然魚が生んだ泳がせ発祥河川

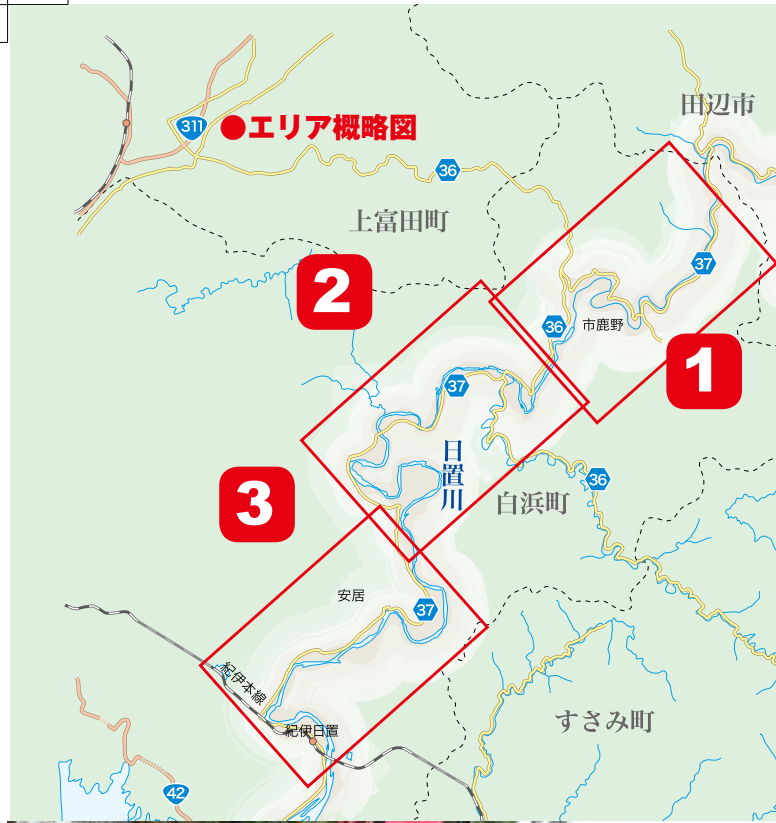
# 日置川 ダム下

敷き詰められた頭大の玉石、やさしくゆったりとした流れ。そこで釣れるアユは肩の筋肉が盛り上がり目つきも精悍な紛れもない真っ黄色の海産。これが、かつての日置川……。いや、今もこの川は生きている！

解説◎福田眞也



市鹿野橋下流のポイントでオトリを泳がせる。2013年8月21日、午後から短時間の釣りで良型がそろった



高所に架かる寺山橋から日置川下流の代表的なポイントである中嶋の瀬、中嶋ゴケを望む。この時は超湯水



水面に自身の影を落とさないこと、アユに釣り人の存在を悟られないこと。これが大事。湯水期はフロロカナイロンが有効



座ったまま野アユをどんどん引き抜く福田さん



バッチリ背掛かり！満足！福田さんの顔がほころぶ

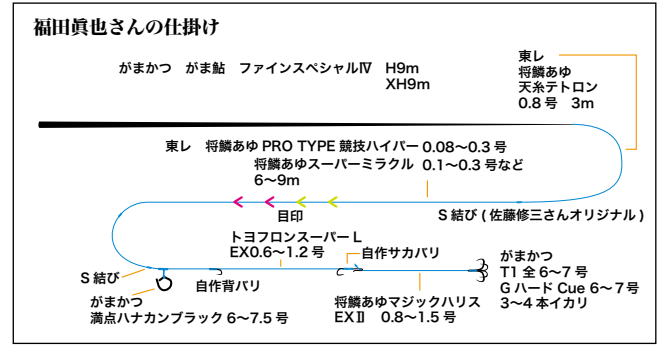


横着をしているのではない。不用意に動かすポイントを荒らさないようにするためだ

## フロロラインの長手尻が有効

日置川は古くから友釣り河川としても有名で、泳がせ釣り発祥の川といわれている。特に合川（殿山）ダムから下流の本流は、そのゆったりとした雄大な流れに魅了される釣り人が多く、私も通い始めて30年以上になる。しかし通い始めたころはなかなか思うように釣れず、友釣りの難しさ、奥の深さをイヤというほど思い知らされた川でもあるのだ。

日置川に通い始めた当時は天然瀬上がたいそう豊富で、まさしく踏むほどに、たくさんの海産アユがいた。「オトリが替われば天国。さもないと地獄」を何度味わったことか……。地元、奈良の川の釣りで少しは自信があった私は、ど



うして釣れないのか理由が分からず打ちのめされた。どうすれば日置川のアユを攻略できるのか？それが当面の課題となった。ここから私自身の仕掛けに対するこだわりや掛けバリの使いこなしが生まれていったのである。1992年、この日置川でG杯の第16回大会に優勝できた時は、言い表せない感慨にあふれたものだ。

'11年9月の台風12号による大災害以降、天然瀬上が思わしくなく漁業組合も苦慮されていることだろ。しかし現組合長は大の友釣りファンで、細かくより丁寧な稚魚放流に取り組んでおられる。往年の日置川復活を祈るばかりだ。

私なりの日置川攻略方法は、まずサラ場であればセオリードであり「朝瀬・昼トロ・夕のぼり」でやってみる。ラインはメタルが複数メタルがかわらない。ただ最近では多くの釣り人がポイントを行き交うので、釣りにくくなっているのはいうまでもない。野アユが見えるのに追いが悪い。野アユ同士は追いついているのに……。メタル系のラインで掛からず困った時はフロロカナーナイロンラインにチェンジして釣るとよい。

それでも反応が悪ければ、手尻を1ヒコ、あるいは2ヒコと長く取って泳がせると効果的だ。掛けバリも4本イカリを使っていたのなら3本イカリに替えてみよう。根掛かりに注意することも大切。右にならえするのではなく、自分右の工夫を重ねてみる。そうしているうちに釣り方をマスターできるはずだ。

日置川のダム下はシーズンを通じて大の橋から下流は数釣りを楽しみ、玉伝から上流、大滝までは良型、大型ねらいというイメージで釣るとよいと思う。

